

日本語読本

学術資料出版
大空社出版
TEL:03-5963-4451
eigy@ozorasha.co.jp

◆ご注文フォーム



全2巻 (I 翻訳 / II ドイツ語原本複製)

ヘルマン・プラウト著 翻訳・解説：森岡健二・志村哲也

B5判・上製・総780頁 (I:330頁 / II:450頁)

ISBN4-283-00458-8 (大空社 2006年3月刊)

定価 27,500円 (本体 25,000円 + 税 10%)

2022年6月1日 現在

残り数セット

原書 1891 (明治 24) 刊 19 世紀ドイツの日本語・日本文化研究の精華
近代日本語形成期の稀少な〈口語〉日本語資料

◆至急ご検討ください。
お取り置き、ご予約承ります。ご相談ください。

(特色) ①刊行 1891 (明治 24) 年、〈口語〉に注目したユニーク・稀少な日本語語学教材・物語集。

②日本文化の懇切な解説を含む、詳細な注釈。

③一般独和辞典が収録しない古語・方言・俗語を多く収録する「和独語彙集」付き。

④外国人の日本語・日本文化理解の具体例として、比較文学・異文化交流史研究の貴重な資料。

⑤ 19 世紀ドイツの言語研究と日本研究の深さを証する貴重資料。

⑥日本語研究のさまざまな面 (ローマ字表記、音声、語彙、文法、口語・文語) に多くの研究材料を与える。

(キーワード) 日本語 (口語・語彙・方言・江戸 / 東京言葉・文法・ローマ字表記・音声)、近代日本文学、落語・講談・語り、比較文学 / 文化、異文化交流、お雇い外国人、ドイツの日本語 / 日本文化研究、海外日本研究、ドイツ語、言語学

【内容】

[I] 翻訳 (ドイツ語原本の概頁数)

(本文) 1) 昔話 (20)

文福茶釜 / 舌切り雀 / 桃太郎の話 / 酒吞童子の話 / 鬼に瘤を取られる / かちかち山

2) 落とし噺の類 (15)

百姓と鳥の噺 / しわんぼう歳暮を贈る / 忘れ薬 / 狡猾な男が花生けを安く買った噺 / 豊後の吉 / 不思議な草の実 / 寄り合い噺 / 頭巾の中の馬糞 / 一休金仏を枕にした噺 / 一休和尚曲がれる松を真っ直ぐに見たる噺 / 一休はしを渡った噺

3) 支那の歴史上の話 (5)

分桃の情 / 司馬温公の甕割 / 孟宗雪中に竹を掘る / 郭巨金の釜を掘る / 覆水盆に返らず

4) 日本の歴史上の話 (135)

藤吉郎小牧山の木を数える / 信長森蘭丸を試す / 紹巴の申し開き / 清正利休を試す / 天一坊 (130)

5) 小説 (115)

蝦夷錦故郷之家土産 (三遊亭円朝)

和独語彙集 (130)

見出語数約 6,500。用例の日本語をすべて翻字、語釈は特記すべきもののみ訳出。

付・参考資料 (R. ランゲ『口語体日本語教本』(1890) 概要およびランゲ著作リスト)

[II] ドイツ語原本複製 (日本国内所蔵僅少)

Japanisches Lesebuch: Märchen und Erzählungen in japanischer Umgangssprache und lateinischer Umschrift nebst Anmerkungen und Wörterbuch. xvi, 428pp., Stuttgart; Berlin: W. Spemann, 1891.

【原著者】 ヘルマン・プラウト Hermann Plaut, 1846-1909

R. ランゲ (下記*) のもとで日本語の研究と教授に従事した。井上哲次郎の留学日記 (1888 年) に、東洋学校で日本語学を履修したとある。本書『日本語読本』(1981) 以外に『日本会話文法』『日本会話文法の鍵』(いずれも 1904) があり数か国語に翻訳されている。

* ルードルフ・ランゲ Rudolf Lange, 1850-1933

1874-81 (明治 7-14) 年、東京医学校でドイツ語・ラテン語等を教えたお雇い外国人で、帰国後大学で日本語・日本文化を教えた。著述多数で、プラウト『日本語読本』が頻りに参照指示をする『口語体日本語教本』Lehrbuch der japanischen Umgangssprache は代表作 (初版 1890、改訂 2 版 1906)、浩瀚・詳細な日本語教本で英語版も広く普及。「古今和歌集」の翻訳もある。

★以下、見本ページ (p.2 ~ 4)



学術資料出版
大空社出版
 TEL:03-5963-4451
 eigyo@ozorasha.co.jp

[176]

V. 小説

28. 蝦夷錦古郷の家土産(*) 176.1
(三遊亭円朝)

第一回

傍(そば)で、御聞(おきき)に入れ升(ます)お話しは、176.2)先達で大臣が北海道へ御巡回の節因らずお供を致しました。其折(そのおり)函館(176.3)で聞(きい)て参りましたお土産のお話しで御坐(ま)りまして初めの程は北海道の処は更に御坐(ま)りませんが、段々末は北海道のお話しに相(あ)なります。——其前(ま)かたは極(た)り古(いにし)えの処のお話しで御坐(ま)りまして安政(176.4)二年十月二日(に)が此のお話し(の)の発端(はつぽん)で世界には天変地異(てんぺんぢい)ということ(は)は度々(たびたび)有(あ)りますが、其中(そのうち)でも安政(の)の大地震(おほいそでん)は一通りならん大(お)変(へん)で御坐(ま)りました。火事(かじ)は悪いもの(もの)に違(ちが)い御坐(ま)りませんが、又(また)大(お)きに陽気(やうき) (177) なども半鐘(はんかね)がジャン！ジャン！ 播木(はんぎ) はポン！ポン！ 鳴(な)る、太鼓(たいこ)をドン！ドン！ 叩(たた)く、拍子木(はしり)をカチカチ鳴(な)らす、提灯(ていとう)を点(つ)けて皆(みな)アリアリヤンリウト(177.1)と、誠(まこと)に陽気(やうき)なもので御坐(ま)りますが、何(なに) (どう)も、地震(じしん)は陰気(いんき)なものでズシン！グラグラ(と)いうと、其(その)ま(ま)で這(こ)い出(で)しますの(の)で何(なん) (なん)となく陰(いん)々(々)と致(いた)します。何(なに) (なん)んな騒動(さわどう)がありましても、母親(はは)は小供(こども)を連れて逃(に)げますが、地震(じしん)の時(とき)は、氣(き)も転倒(てんたう) (てんたう) 致(いた)しますから、自分(おれ)が先(ま)へ逃(に)げま(ま)して坊(ぼく)や危(あぶ)険(けん) (あぶ)ない) から、「サツサと逃(に)げてお出(いで)！」なん(なん)のと、手(て)招(ま)き (ま)き) をして逃(に)げます。大(お)きに親(おや)子の情(なさけ)を失(う)ちます。実(じつ)は地震(じしん)は能(よ)くないもので安政(の)の大地震(おほいそでん)、これ(これ)は実(じつ)に氣(き)が転倒(てんたう)いた(いた)します訳(わけ)で私(わたくし) (円朝) どもは存(ぞん)じて居(ゐ)りますが、ソ(ソ)リヤ！地震(じしん)と(と)いうと、母(はは)親(おや)が乳(ち)呑(の)み置(お)き (お)いて駈(か)け出(で)します。且(ま)だ様(さま)にお三(さん)どんが抱(か)きつ(つ)く、奥(おく)様(さま)は飯(い)飯(い)男(お)に背(お)ぶさ(さ)つて逃(に)げ出(で)す、十二(じふに)三(さん)の娘(むすめ)は向(むか)う鉢(はち)巻(ま)きをして家(いえ)根(ね) [大家(だいに)根(ね)] を破(やぶ)して大(お)工(こう)を引(ひ)出(で)す。大(お)病(びょう)人が看(かん)病人(びょうにん)を背(お)ぶさ(さ)つて這(こ)い出(で)す、按(あん)摩(ま)さん(さん)がお堀(ほり)へ駈(か)け込(こ)むや(や)ら、火(か)の見(み)番(ばん)が火(か)の見(み)から飛(と)り下(くだ)りて家(いえ)体(たい)見(み)世(よ) (やたいみせ) の下(した)になり、天(てん)麩(ほ)羅(ら)屋(や)が橋(はし)から舟(ふね)へ飛(と)び込(こ)みますと、船(ふね)頭(あたま)が飛(と)び上(あ)が(あ)が)つて引(ひ)つ(つ)ぱり女(おんな)を踏(ふ)みつ(つ)ぶすや(や)ら、瀬(せ)戸(と)屋(や)の御(ご)亭(てい)主(ぬし)は慌(あわ)てて駈(か)け出(で)すとたんに、看(かん)板(ばん)の大(お)土(つち)瓶(びん)へ突(つ)き当(あた)って菓(か)蜜(みつ)頭(あたま) (やかんあたま) へ漏(も)れ (も)れ) を拵(も)ちえ、酒(さけ)屋(や)の御(ご)亭(てい)主(ぬし)は駈(か)け出(で)すはずみに呑(の)み口(くち) (のみぐち) を残(のこ)らずぶ(ぶ)つこ抜(ぬ)いて瀧(たき)水(すい) (たきすい) の泉(いずみ)を流(なが)し、汁(じゆ)粉(こな)屋(や)は鍋(なべ)で火(か)傷(やけど)をす(す)る。御(ご)殿(でん)女中(にようぢゆう)は裸(はだか)で駈(か)け出(で)す、角(かく)力(りき)取(と)り夜(よ)着(ぎ)を着(き)て這(こ)い出(で)す。そう(そう)か！と(と)思(おも)うと、お大(お)名(な)の

176.1) 《蝦夷錦という故郷への土産》。蝦夷は北日本の大きな島で、現在ではクリル諸島を含め北海道と呼ばれる。「錦」という表現はよく本の題に用いられる。この物語の初出は1888年〔明治21〕である。この翻訳はいくつかの卑猥で写實的過ぎる箇所を削除し、あまたの誤植を訂正した点を除けば原典と一致する。作者は今なお存命〔1839～1900年〕の有名な「癡家」出淵(**)次郎吉であり、三遊亭円朝の名で書いている。

176.2) 《私が語「ろうとする」話とはいえば、私は…しました》。ここに言及される大臣とは山県〔有朋〕卿と

井上〔馨〕卿で、円朝は1886年〔明治19〕に蝦夷へと随行した。

176.3) 北海道の一都市で条約港。

176.4) 安政年間(1854～1859年)の大地震で江戸には104,000人の死者が出た。

177.1) 交雑する音を表す擬音語。

(*) (えぞにしきこきょうのいづつと)

(**) 原文 Debuchi とあるが正しくは「いづぶち」。

「プラウトは、日本には口語体で書かれた読物が極めて少ないと断って、こういう中で第一の位置を占めるのは噺家・三遊亭円朝の短編群であると言って、「蝦夷錦故郷之家土産」を採録している。この他の話は、一部は日本の友人たちに語ってもらったままに書き留めたものであり、一部は文語体から再話ないし翻訳したものであると、話題の出所を語っている。つまり、『日本語読本』は当時日本に少なかった口語体で書かれている物語集である。(…) この本は、面白い話が集まっているので、一般には日本の物語として読まれたかと思われるが、内容は明らかに語学書である。」

——解説(森岡健二)より

2022年6月1日 現在

残り数セツト

◆至急ご検討ください。
 お取り置き、ご予約承ります。
 ご相談ください。

[I] 翻訳

[II] ドイツ語原本複製

V. Shōsetsu.

28. Ezo-nishiki kokyō no iezuto.†)

(Enchō Sanyūtei.)

Dai ikkai.

sate, o kiki ni iremas' o hanashi wa, 2) sendatte daijingata ga Hokkaidō ye go junkai no sets' hakarazu o tomo wo itashimash'ta. sono ori Hakodate 3) de kiite mairimash'ta o miyage no o hanashi de gozaimash'te hajime no hodo wa Hokkaidō no tokoro wa sara ni gozaimasen' ga, dan dan sue wa Hokkaidō no o hanashi ni ainarimas'. — sono maekata wa goku furui tokoro no o hanashi de gozaimash'te Ansei 4) ni nen jū gats' futs'ka ga kono o hanashi no hottan de sekai ni wa tempen chii to iu koto wa tabi tabi arimas' ga, sono naka de mo Ansei no ōjishin wa hito tōri naran' taihen de gozaimash'ta. kaji wa warui mono ni chigai gozaimasen' ga, mata ōki ni yōki

†) «Ezo-Brokat, ein Reisegeschenk für die Heimath.» Ezo, die nördliche grosse japanische Insel, jetzt mit den Kurilen zusammen Hokkaidō genannt. — Der Ausdruck *nishiki* findet sich öfter als Buchtitel. — Vorliegende Erzählung erschien zuerst 1888. Die Umschrift stimmt bis auf die Auslassung einiger allzu derbrealistischer Stellen und die Verbesserung zahlreicher Druckfehler mit der Urschrift überein. Ihr Verfasser ist der noch lebende, berühmte *hanashika* (Erzähler) Debuchi Jirōkichi, der unter dem angenommenen Namen Enchō Sanyūtei schreibt.

2) was die Geschichte betrifft, die ich Ihnen erzählen will, so habe ich u. s. w. — Die hier erwähnten Minister sind die Herren Yamagata und Inoue, in deren Gefolge Enchō 1886 nach Ezo reiste.

3) Stadt auf Hokkaidō, Vertragshafen.

4) die Periode Ansei dauerte von 1854—1859. — Bei dem grossen Erdbeben kamen in Edo 104.000 Menschen um.

27. Tenichibō.¹⁾Dai ikkai.²⁾

Tokugawa³⁾ hachi dai no shōgun Yoshimune kō to mōshimash'ta
o kata wa, Ieyasu kō no shison de⁴⁾ Kii no kuni Wakayama no
jōshu jūnii dainagon⁵⁾ Mitsusada kō no san nan de arimash'ta.

¹⁾ Die volkstümliche Geschichte Tenichibō's ist in vorliegender Gestalt eine Bearbeitung der gleichnamigen Erzählung enthalten in dem Werke Ōoka Meiyo Seidan, einer umfangreichen Sammlung von Rechtsfällen, in denen der kluge Stadthauptmann von Edo, Ōoka (s. weiter unten) als Richter eine Rolle spielt.

²⁾ Wb. *kai*.

³⁾ Minamoto Tokugawa Ieyasu, geb. 1542, aus dem berühmten Geschlecht Minamoto (auch Genji oder Genke, vgl. S. 9 Anm. 8), das schon von 1192—1204 und abermals von 1336—1573 die erbliche Würde eines *Shōgun* (Reichsverwesers) inne gehabt hatte, wurde nach dem Tode Hideyoshi's (s. S. 40 Anm. 1) und nach Besiegung der Anhänger Hideyori's, des jungen Sohnes Hideyoshi's, bei Sekigahara am Nakasendō, 16. October 1600, vom Kaiser zum *Shōgun* ernannt, welche Würde bis zum Jahre 1868 in seiner Familie forterbte. Den Namen Tokugawa führte die Familie nach einem früheren Besitz in Shimotsuke. Ieyasu ist auch der Gründer der Stadt Edo (jetzt Tōkyō) an der Stelle eines Stranddorfes gleichen Namens. Nach seinem Tode 1616 wurde er unter dem Namen Tōshō Daigongen (徳川 義光) Jinkun, volkstümlich Gongen sama) d. h. «Licht des Osternation Buddha's» deificiert. — Auf Ieyasu folgte sein 3. Sohn sein 4. Sohne gab er die Provinz Owari (Bishū), dem 7. (Kishū) und dem 8. Mito (in Hitachi oder Jōshū). Owari hiessen Go san ke, «die drei erhabenen Familien». Aus Ieyasu's Bestimmung, im Falle der regierende *Shōgun* I. hatte, dessen Nachfolger gewählt werden. Die Linie Hidetada 7. *Shōgun*, Ietsugu, aus (1716) und es folgte Yoshimune, und Urenkel Ieyasu's, aus dem Hause Kii, das die *Shōgun* inne hatte, worauf ein *Shōgun* aus dem Hause Mito folgte bis 1868 regierte, in welchem Jahre das *Shōgunat* abgeschafft wurde. Haus Owari ist nicht zur Nachfolge gekommen. — Yoshimune ein grosses Verdienst durch Einsetzung einer Kommission des geltenden Rechts, die bis 1840 bestand.

⁴⁾ *de* = *de arimash'te*; war ein Abkömmling von — von u. s. w. — Wakayama, Hauptstadt von Kii.

⁵⁾ Die Fürsten von Kii führten als solche den Titel *daijū* erst vom 66. Lebensjahre an; *jūnii* ist der persönliche Rang.

* 判型 B5 判(182 × 256 ㍉)

学術資料出版
大空社出版
TEL:03-5963-4451
eigo@ozorasha.co.jp

2022年6月1日 現在

残り数セット

◆至急ご検討ください。
お取り置き、ご予約承ります。
ご相談ください。

[II] ドイツ語原本複製

[I] 翻訳

47

[47]

27. 天一坊^{47.1)}第一回^{47.2)}

徳川^{47.3)} 八代の将軍吉宗公と申しましたお方は、家康公の子孫で^{47.4)} 紀伊の国和歌山の城主従二位大納言^{47.5)} 光貞公の三男でありました。[48] 幼名(ようみょう) ^{48.1)} 徳太郎君(とくたろう)と申し上げました。母君は九条^{48.2)} 先の関白(かんぱく) 太政大臣の第四(よ)の姫君でありました。一体徳川時代には諸侯の奥方は必ず江戸におらなければならない筈でありました^{48.3)} けれども、光貞公が紀州和歌山で大病に罹(ひ)られまして、^{48.4)} その奥方が直(ただ)に看病なされたいということを度々將軍家へ願ひ出されましたゆえ、例外に奥方も国元へ差し遣わされました。さて、奥方が在国中^{48.5)} ある夜の夢に^{48.6)} 日輪と月輪(ひつるんとつきりん)とを両方の手に握ると^{48.6)} 見られまして御懐妊になりました。奥方は、余り不思議な夢ですから、光貞公にお話になりました。^{48.7)} すると、公は喜ばれまして、「もしもこの子が男ならば、世に名を挙げるほどの偉い者になるにちがいない」^{48.8)} と仰せられました。その後貞享^{48.9)} 元年正月二十日(はつか) 卯の刻^{48.10)} 玉のような御男子(ごなんし) が誕生になりました。

47.1) このような大衆的な天一坊物語は、聡明な江戸の町奉行、大岡(下記参照)が裁判官として活躍する浩瀚な歴史事件集『大岡名譽政談』という作品に含まれる、同名の話の再話である。

47.2) [kai (VI)]

47.3) 源(みなもと) 徳川家康。1542年生まれ。高名な氏族である源(源氏(げんじ)または源家(げんけ)とも(9.8))の出。同氏はすでに1192～1204年、そして1336～1573年再び将軍(摂政)の世襲位を占めている。秀吉の死後(〔40.1〕)そして中山道沿いの関ヶ原で秀吉の若い息子、秀頼の支持派を打ち破ってから、1600年10月16日天皇から将軍に任命され、その位は1868年まで同家に継承された。同家は下野の旧所領から徳川の名を取った。家康は同名の漁村から江戸(現東京)を興した都市創設者でもある。没後の1616年後は東照大権現(東照仁君、俗に権現様とも)すなわち「東の光、偉大な仏陀の化身」の名で神格化された。家康の跡を継いだのは三男の秀忠である。四男には尾張地方(尾州)を、七男には紀伊地方(紀州)を、八男には(常陸または常州)の水戸が与えられた。尾張、紀伊、水戸は御三家「三つの崇高な家」であった。家康の命により在位中の将軍に跡継ぎがいなかった場合、その三家から後継者が選ばれるようになっていた。秀忠の家系は七代将軍家継で絶え(1716年)、光貞の子で家康の曾孫、紀州家の吉宗が跡を襲い、同家は1867年まで将軍職を占めた。その後を継いだのは水戸家の将軍慶喜で、1868年まで統治したが、同年幕府は廃止された。尾張家が後を継ぐことはなかった。吉宗には1840年までに成立した現行法の編纂委員を任命したことで大きな業績がある。

47.4) 「で」=「でありまして」。《…出身者で…の三男だった云々》。和歌山は紀伊の首都。

47.5) 紀伊藩主は同時に「大納言」の位を帯びていた(元来は66歳になってから。従二位は光貞個人の位階)。

48.1) 子供は生後七日で名を与えられ(「幼名」、それは15歳か18歳まで持ち続けるが、それからすぐに前頭部を剃り落とす儀式(「元服」)および後頭部の髪を房に結うこと(「髷」)で、幼名は成人名に替えられる。その後も重要な折々にはしばしば名前を変えることがあった。

48.2) 九条は最高級の公家(宮廷貴族)の名。

48.3) 全ての大名は一年の一時は江戸に、残りはその所領に交互に住むことが徳川政権下の掟であった。しかし家族は忠誠の証の質として常に江戸に住まねばならなかった。

48.4) 敬語表現の可能形 [L. 229]。

48.5) 《(大名の) 所領に滞在する間》。江戸に滞在することは「江戸詰め」といった。

48.6) 「…ということをも」夢「に」見た。

48.7) 「になる」を伴う語幹形については [L. 244, 2節]。

48.8) 彼が一名を成すという程度にまで立派な男になることは疑いない。

48.9) 貞享時代は1684～1687年。

48.10) 《(大名の) 所領に滞在する間》。一日は中国の算法では2時間ごとに12等分された(「刻」)。この12の刻には中国の黄道十二宮の名がつけられていた。「子」=鼠(午後11時～午前1時)、「丑」=牛(午前1～3時)、「寅」

『日本語読本』は、日本の歴史、風俗、習慣すなわち武士、町人、百姓などの言語を階層に応じて描き分けていてその点でも貴重だが、この本の価値を一層高からしめているのは、ページごとに施された脚注である。この注釈は日本の言語・文化を学ぶ学生のためのもので、実に念の入った多様な注釈で、本書にとって欠くことのできない重要な位置にある。固有名詞の注もあるが、最も力を入れているのは文法で、助詞、動詞の活用だけでなく、微妙なことば遣いやニュアンスを微に入り細を穿って詳しく説明している。注目したいことは、同じ語句や類似の表現について、「見よ(s.)」「参照せよ(vgl.)」という指示が非常に多いことである。特に、ルードルフ・ランゲ『口語体日本語教本』(1890)を「参考にせよ(L.)」という指示が多く、いかに語彙の指導に力を入れていたかが分かる。」

— 解説 (森岡健二) より



* 判型 B5 判(182 × 256 ミリ)

2022年6月1日 現在

残り数セット

◆至急ご検討ください。お取り置き、ご予約承ります。ご相談ください。

学術資料出版 大空社出版 TEL:03-5963-4451 eigyo@ozorasha.co.jp

Japanisch-Deutsches Wörterbuch (和独語彙集)

surā — tabijitaku. 399

surā s. suru. suriko Kinderbrei. suriyoru heranrutschen. suru reiben; han de sutte aru mono etwas Gedrucktes. suru (vulg. Imper. shii 253 Anm. 6; neg. Imper. o shi de nai yo; sh'cha, sh'cha = sh'te wa; sh'taite = sh'ta to iu 217 Anm. 8; seba = sureba 57 Anm. 1; surā = suru, na 194 Anm. 1; seru 126 Anm. 4; seshi 124 Anm. 5; seshi ni tsuki = sh'ta yue 126 Anm. 5); thun, machen; ni —, to — machen zu, werden zu; ni, to sh'te (wa) als, für (28 Anm. 1); ni sh'te (Schriftspr.) = ni natta toki (68 Anm. 6); ni sh'te oku sein lassen, stehen lassen; machen zu; watashi ni sh'te (mite) mo wenn ich an seiner Stelle wäre; koto ni — (mit vorhergehendem Verb) es so machen, dass; sich entscheiden für; (tatoe) ... ni mo seyo, shiro wenn auch, obgleich ..., doch; kō sh'te so, auf diese Weise; sō — to, sō sh'tara, sō sh'te (mireba), sō sh'te orimas' uchi, sō sureba s. sō II; to —, to sh'te (mit vorhergehendem Fut.) = to omou, to omotte im Begriff (sein) zu (19 Anm. 9); — darō nach einer Doppelfrage (87 Anm. 2); — to hierauf. surudoī scharf; von scharfem Verstand, klug. Suruga (30 Anm. 4).

surasamajū (Adv. susamajiku) schrecklich, schauerlich. suso Rand, Saum, Rockschoß. susosabaki die schickliche Anordnung der Kleidersäume. susomoyō, — no mit gemustertem Saum. susuhaki Ausfegen, Reinigen; — wo suru ausfegen, rein machen. susumeru 1 vorwärts bewegen; darbieten; zureden, rathen. susumideru 1 vorwärtsgehen, vortreten, näher herankommen. susumu vorwärtsgehen, vorrücken, sich nähern. suu schlürfen. suwa (Ausruf = sa, sorry) da! Suwa, Suwako (213 Anm. 3); Suwamyōjin (112 Anm. 2). suwaraserareru 1. zum Sitzen eingeladen werden. suwaraseru 1. zum Sitzen einladen; einsetzen. suwarikomu sich hineinsetzen. suwaru (mit untergeschlagenen Füßen) sitzen, hocken; hinzugefügt sein, darunter stehen (von einer Unterschrift). suzukake eine Art mit Troddeln besetzter Schärpe, von yamabushi um den Hals getragen und vorn herunterhängend. suzume Sperling. suzumeodori Sperlingstanz.

T. ta, — no ein anderer, andere, die anderen; kono, sono — no ein anderer; sono — ausserdem, ausser diesen. tā (vulg.) = to wa. taba Bündel; hito — ein Bündel. tabakarareru 1. betrogen werden. tabakobon Rauchservice. tabane Bündel; — wo suru, itas' zusammenbinden; hito, mono no — wo suru Leute unter sich, unter seinem Befehl haben. tabehajimeru 1. anfangen zu essen. tabekko, — no kake Esswette.

T. taberu 1. essen; tabete miru kosten. tabesaseru 1. zu essen geben. tabi mal; — oftmais; kono — diesmal, in dieser Zeit; futu — zum zweiten Mal, wiederum; — (nach dem Verb) jedesmal, wenn; so oft als tabi Reise; — no reisend — wo suru reisen. tabibito Reisender. tabidachi Abreise. tabidats', wo — abreisen vor tabijitaku Reisevorbereitung.

【II】ドイツ語原本複製

「さらに、この『日本語読本』で注目すべきことは、巻末の「和独語彙集」である。この用語集は、『日本語読本』に収録された物語の全語彙に読み・意味・用例を説明した一種の和独辞典で、一般の独和辞典に登録されていない江戸言葉・方言・俗語が大量に集められていて、貴重である。」 — 解説 (森岡健二) より

sumu (進む) 64, 71, 77, 79, 100, 116, 128, 142, 202; 少しの怪我で進む; 進むものではない; 済まない・済みません(のです) 24, 49, 184, 202, 204, 205, 215, 236, 251, 253; 済まない心持がする 107; に(は) 済まない 203-4; 重々済みません 283; 済まねえ 199; 済まん事 287; それじゃ済まない 199. sun (寸) 二三寸 97. sunawachi (即ち) 22, 33, 40, 42, 51, 59, 74, 85, 91, 99-100, 106, 111, 116, 118, 128-9, 134, 148, 152, 157, 160, 169, 290. sune (脛) 242. sunete (脛当て) 241. sunekizu (脛傷) 脛疵 185. sūnen (敷年) 59, 156, 164; 敷年の間 76; 敷年来 81. suppari (スッパリ) 226. surā (すら) ですら 150; すらすらと 241. sura (すらあ) [suru] 194. suriko (搦り粉) 64. suriyoru (すり寄る) 277. suru (刷る) 版で刷つてあるもの 223. suru (する) 図 図 = しい [253.6]; 図 図 = おしてでないよ; しちや、しちやあ = しては; したって = したと書く [217.8]; せば = すれば [57.1]; すらあ (= する) な [194.1]; せる [126.4]; せし [124.5]; せしに付き = したゆえ [126.5]; にする、とする; に・として(は) [28.1]; にして(て) [図] = になったとき [68.6]; にしておく; わたしにして(みて)も; (圖+) ことにして; (たとえ) ... にもせよ・しる; こうして; そうすると、そうしたら、そうして(みれば)、そうしておりますうち、そうすれば [so (II)]; (圖+) とする、として = と思う、と思って [19.9]; するだらう [87.2]; すると 4. surudoī (鋭い) 242. Suruga (駿河) [30.4]. susamajū (凄まじい) 圖 = 凄まじく || 106, 179.

【I】翻訳

suerareru — taema 249 suso (裾) 106, 180, 231 susosabaki (裾捌き) 219, 233, 252 susomoyō (裾模様) 裾模様の 273, 275 susuhaki (裾掃き) 裾掃きをする 71 susumeru (I) 【進める・勤める・奨める】(進) 103, 119, 127, 130 || 【勤】100, 109, 252 || 【奨】37-8, 64, 70 susumideru (I) 【進み出る】111, 126, 147, 159 susumu 【進む】119, 153; 進ませる 124, 133 suu (吸う) suwa (すわ) = さ、そりや Suwa (諏訪) 諏訪湖 [213.5]; 諏訪明神 [112.2] suwaraserareru (I) 【坐らせられる】 suwaraseru (坐らせる) suwarikomu (坐り込む) 177 suwaru (坐る) suzukake (蓑懸) 10 suzume (雀) 3-5 suzumeodori (雀踊り) 4 T. ta 【他】他の 31, 145; この・その他の 13, 105, 118, 126, 128, 133, 159, 172, 175; その他 59, 65, 121, 139, 144, 149, 170, 174-5, 189 tā 【たあ】 圖 = to wa とは 196 taba (束) 一束 17 tabakarareru (I) 【揉まれる】175 tabakobon (煙草盆・烟草盆) 186, 199, 208, 275 tabane (束ね) 束ねをする・致す; 人・物の束ねをする 207-8, 210 tabehajimeru (I) 【食べ始める】29 tabekko (食べっこ) 食べっこの賭け 29 taberu (I) 【食べる】6, 23-4, 35, 37, 69, 72, 88, 228-9, 232, 258, 266, 284; 食べてみる 35; 食べられる 268 tabesaseru (I) 【食べさせる】23, 267 tabi (度・毎) 度々 48, 91, 149, 158, 176, 188, 196, 234, 257; この度 50, 53, 60, 62-3, 65, 84, 115, 119, 122, 125, 128, 133, 135, 143, 156, 159, 165-6; ふた度; 数多たび 37; 幾たびか 22 || (圖+) 毎 250 tabun (多分) 75, 85, 107, 144, 154, 231 || 多分の 62; 多分の持ち合わせ 234 tabusa (髯) 276 tabyō (多病) 多病である 149 tachi (太刀) 41 tachi (質・性質) 66, 188, 226 tachiagaru 【立ち上がる】88, 98, 106, 110 tachiiai 【立ち会い】立ち会ひの上 175 tachiiau 【立ち会う】130 tachideru (I) 【発ち出る】を発ち出る 118, 131, 138, 161, 173 tachifurumai 【立ち振るまい】 tachifurumawareru (I) 【立ち振る舞われる】 圖 < tachifurumau || 51 tachigiki 【立ち開き】立ち開き(を)する; を立ち開きする tachihataraku 【立ち備く】80 tachitaru 【立ち至る】大事に立ち至るところでありました 110 tachikaerareru (I) 【立ち帰られる】 圖 < tachikaeru tachikaeru (2) 【立ち帰る・立ち返る】5, 53, 62 tachimachi 【忽ち】忽ち(に) 179 tachimoduru 【立ち戻る】26 tachinokeru (I) 【立ち退ける】 tachinoki 【立ち退き】159 tachinoku 【立ち退く】62, 159; を立ち退く 82-3, 91 tachiōseru 【立ちおおせる】腹を立ち終せる 281 tachiotoshi 【載ち落とし】218 tachisaru 【立ち去る】(を)立ち去る 75, 83, 90, 102, 110, 164 tachi-yori 【立ち寄り】77 tachi-yoru 【立ち寄る】77, 97, 118, 122 tada (唯・只) (唯) 9, 16, 28, 38-9, 44, 52, 87, 97, 102, 108, 116, 119, 127, 130, 132, 142, 169, 175, 230; (只) 28 || 只の 72, 112 tadachi (直ち) 直ちに 137 tadaima (只今) 24-5, 65, 73, 86, 116, 127, 130, 138-9, 146, 152-3, 157, 168, 174, 207, 233, 254, 262-3, 273,